

---

# 迷えるカノジョとチキンなオレと

リプトン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

迷えるカノジヨとチキンなオレと

### 【Nコード】

N4056Y

### 【作者名】

リプトン

### 【あらすじ】

オレ、庭渡<sup>ニフト</sup> 理桜<sup>リオウ</sup>は私立浪嵐学園で平和で平凡な生活を送っていた。だけど、幼馴染み兼親友で変な「体質」仲間のジローこと坂町<sup>サカマチ</sup>キンジロー<sup>キンジロー</sup>に巻き込まれ（？）、それを手放すことに……。あの時、ジローとさえ行動していなかったら……orzオレとジローは執事の秘密を知り、お嬢様に弱点を握られた。さまざまな女の子たちと過ごす学園ラブコメディー。（処女作なので駄作間違いなしですがそれでも良いと言う方は是非読んでください。）



## ブローグ

side ジロー

幼馴染みで親友の庭渡<sup>ニコト</sup> 理桜<sup>リオウ</sup>と一緒に登校している。俺はこいつの事をリオと呼んでいる。

リオ「なあ、ジロー」

ジロー「なんだ？」

門の前にはリムジンが止まっており、そこには浪嵐学園の有名人二人<sup>ススツキ</sup>が立っていた。一人はこの学園の理事長の一人娘である涼月<sup>カナデ</sup>奏。

リオ「なんでスバル様は執事なんてしてるんだろおな？」

リオはもう一人、燕尾服を着た近衛<sup>コノエ</sup>スバル<sup>スバル</sup>を指して、そんな疑問を投げてきた。

ジロー「今更な質問だな」

執事。そう、近衛スバルの職業は紛れもなく執事なのだ。あの燕尾服はコスプレなんかじゃないのさ。いや、ね。俺だって初めて聞い

たときは耳を疑いましたよ？ 執事って、なんだよそりゃ。「冗談じゃない。なんでそんな職業がこの現代社会に残ってたんだよ。しかも普通に高校に通いやがって。もういっそのこと天然記念物にでも

リオ「メイドだよな」

ジロー「は？」

リオ「いやだつて……スバル様って……やるなら執事じゃなくてメイドって感じだろ」

ジロー「はい？」

俺は幼馴染みで親友の言葉に思考を中断させ、目眩を覚えた。

ジロー「おい、リオ。大丈夫か？」

いくら、スバル様が女顔だからってそれは失礼だろ。

リオ「……オレは正気だ……と思いたい……」

リオは自信無さそうに言った。この時、俺はリオがおかしくなった  
と思った。だが、それは俺のおおいな間違이었다。そう、放課後  
に思いしらされることになるのだ。

## オリキャラ紹介（前書き）

オリキャラ・リオっちのプロフィールです

## オリキャラ紹介

庭渡 ニワト 理桜 リオウ

(男)

身長 178 cm

体重 57 kg

### 容姿

- ・ 顔は中の上
- ・ 目と髪は灰色。学園時はカツラ(黒) + カラコン(黒)。
- ・ 髪型はツンツン。

### 特技

- ・ 家事全般
- ・ リフティング

### 趣味

- ・ 昼寝
- ・ 料理
- ・ 読書
- ・ サッカー

### 好きなもの

- ・ ホットケーキ
- ・ コーヒ
- ・ サッカー

### 苦手なもの

- ・ 女性



・同性愛

\*

・欧州系のクォーター。母親がハーフ。欧州系の血を強く色濃く受け継いでしまったので髪と瞳の色が灰色。目立つからと学園ではプチ変装している。

・名前は父（友理）の『理』と母（桜）の『桜』を合わせて付けられた。フルネームにコンプレックスあり。

・とある事件に巻き込まれ、女性恐怖症となってしまった。

## オリキャラ紹介（後書き）

リオ「ずいぶんと内容の乏しい紹介だな」

リプトン「そこはご愛嬌ってことで」

リオ「オレの性格とかは？」

リプトン「本編を読んでもらうしかないね」

リオ「いい加減すぎるだろ」

リプトン「しかたないんだって。ボクに文才がないんだから」

リオ「……はあ……先行き不安だけどみなさん、こんなんですがこの小説をよろしく願います」

## 第1話

side リオ

ジロー「なあ、リオ」

リオ「なんだ、ジロー」

ジロー「どうしてこうなった？」

リオ「オレが聞きたいぞ」

オレたちは今、理科室に籠城し、小声で会話していた。扉の前には机やら椅子やらでバリケードが形成されていた。

リオ「……ただ一つ言えることは……」

ジロー「言えることは？」

リオ「アイツに捕まればdead end直行、間違いない」

不穏な会話をしているよな？ けどしかたないんだ。今、オレたち

はこの学園で敵に回してはいけないトップスリーに入っているであろうスバル様相手にリアル鬼ゴッコ中なのだから。なぜ、リアル鬼ゴッコをしてるかって？ ジローがスバル様のパンツを見てしまったらしいんだ。運悪くオレもそこに居合わせていたので追われてるんだ。それで、殴ると言うスバル様の家に代々伝わるデンジャラスな執事流記憶消去術から全力で逃れなければならない。捕まったら記憶どころかオレたち自身がデリートされかねないからな。ってか、オレはなんも見えてないのに！

ジロー「し、洒落になってねえぞ」

リオ「洒落じゃない。マジだ」

オレは近くにあった人体模型（通称ジョニー）でバリケードを補強

ゝドキヤッ！ゝ

した瞬間、理科室に響く破碎音。ひどく嫌な予感を感じながら音のした方を見ると、そこには鮮やかに宙を滑空するドアの姿。スバル様がドアを蹴破っていた。様になってますねえ。

「「うおおっ！？」」

弾け飛んだドアをかわすオレとジロー。そして、がちやがちやと音を立てて床にぶちまけられるジョニーの内蔵たち。うわぁ、悲惨だ。

スバル「追い詰めたぞ」

ジロー「うらあああっ！」

理科室に入ってくるスバル様目掛けてジローは全力でジョニーをフルスイングした。だが、それも虚しく

スバル「なめるな！」

怒号一閃。打ち込まれたスバル様の右ストレートがジョニーの首から上を吹っ飛ばしていた。サヨナラ、ジョニー。オマエのことは忘れないぜ。

ジロー「ふう……」

覚悟を決めたのかジローはゆっくりと拳を構えた。頭部をガード出来るよう両腕をしっかりと上げた構え。これはジローに最も向いたスタイル。そう、オレもジローもズブの素人ってわけじゃないんだな、これが。

スバル「やっとやる気になったみたいだな」

ジローに伝えるように、スバル様もファイティングポーズを取った。ちなみにオレはなんも構えない。だって、逃げるために体力温存しときたいもん。

スバル「今度こそ仕留めてやるぞ。ボクの『執事ナツクル』でな」

リ・ジ「……」

うわぁ、ダセエ。なんだよ、執事ナツクルって。

ジロー「どうでもいいけど、オマエってネーミングセンスないな」

スバル「なっ……何を言う！　かつこいいだろ！？　ほら、執事ナツクル！」

リオ「いや、かつこ悪いよ。執事ナツクル」

率直な感想を伝えてやると、スバル様は顔を赤くしてうつつと唸っ

た。

スバル「くう……こんな侮辱を受けたのは生まれて初めてだ。もう、許さないぞ。おまえたちには、ボクの必殺技を喰らわせてやる」

リオ「必殺技？」

スバル「そう、名づけて『エンド・オブ・アース』」

ジロー「スケールでえええっ！ 滅ぼしてんじゃん、地球うつつ！！」

ジローの渾身のツツコミが決まった。

リオ「やっぱり、そのネーミングセンスはどうかと思うよ」

スバル「う、うるさいな！ ボクのネーミングにケチをつけるな！」

リ・ジ「……」

リオ「ごめん、オレたちが悪かったよ。オマエだって、一生懸命考

えたんだよな……」

ジロー「ごめん、俺たちが悪かったよ。おまえだって、一生懸命考  
えたんだよな……」

スバル「ハモるな！　なんだその悟りきつた顔は！　そんな可哀想  
なものを見るような目でこっちを見るなよ！」

くそう……　かつこいと思ったのに……　一週間もかけて考えたのに  
……　とスバル様は小さな子供みたいに口唇を尖らせて拗ねた。何？  
この可愛い生き物……。

リオ「！？」

気付いた。スバル様の横にある棚。その上にある大きな硝子製のビ  
ーカーが、今にも落ちようとしていた。

ジロー「避ける！」

ジローが反射的に体を動かしていた。不意に張り上げた声にスバル  
様は口を開けてぽかんとしている。どさりとジローがスバル様を押  
し倒した。そして、オレも落ちてきたビーカーをなんとか掴めた。

リオ「ふう……　ってあぶねえ！？」



安堵したのも束の間、他にもあったビーカーが時間差で落ちてきていた。オレは咄嗟に避けた。ビーカーは呆気なく碎け破片が散らばっていた。

スバル「きゃあああああっ！」

リオ「なんだ？」

女の子みたいな甲高い悲鳴。

ジロー「こはあっ！」

振り向くとジローが宙を浮いていた。ビーカーの破片を避けるように理科室の床にダイブしていた。運の良いヤツだ。

リオ「ジ、ジロー？ オマエ、なんで鼻血が……」

ジロー「なっ、そんな、どうして……」

おかしいことに、顎を殴られたはずのジローは、なぜか真っ赤な鼻

血を出していた。ジローは女性に触られただけで、鼻血が出て、最終的には失神してしまうという稀有な体質な女性恐怖症だ。スバル様を見るとはだけた服からは案の定、胸が膨らんでいた。うん、確定だ。スバル様は女だ。やっぱりオレは間違ってたんだ！

スバル「 殺す！！」

スバル様が近くに置いてあった消火器を悠然と構えていた。

ジロー「ちょ、ちょっと待ってくれ近衛さん。そんなので殴られたら、記憶が飛ぶどころじゃすまない気がするんですけど……」

スバル「ああ、そうだ。おまえみたいな変態は、この世界にいちやいけないんだ……」

ジロー「じつ、事故だ！ あれは事故だったんだ！」

スバル「何が事故だ。ボクの……ボクの胸を触って興奮して鼻血まです出したくせに……！」

ジローは腰が抜けて動けないようだ。

ジロー「違っただって！ 俺は興奮して鼻血を出したわけじゃない！ これは俺の身体が」

スバル「問答無用。終わりだ。絶望を噛み締めながら、死ぬがいい」

「ごんっ」

鈍い音がしてジローが倒れた。スバル様はそれでも気がすまなかったのか連続でジローに消火器をぶつけ続けていた。

スバル「次はおまえの番だ。庭渡 理桜。覚悟しろ」

気がすんだのかターゲットがジローからオレに移ったようだ。いつものオレならスバル様がジローに気をとられてる間に逃げているはず。だけど、オレの身体は震えて言うことをきかなかった。

『さあ、僕。お姉さんと愉しいことしようね』

迫り来るはだけたスバル様の姿がオレの中の忌々しい記憶と重なってしまっていたから。

## 第2話（前書き）

紫苑さん感想ありがとうございます。

## 第2話

スバル「可哀想に……そんなに震えなくても大丈夫だ。一瞬で終わらせてやるからっ！」

そう言い、オレ目掛けてスバル様は全力で消火器をフルスイングした。

リオ「くっ……！ はぁ……はぁ……チ、クシヨ」

オレはなんとか頭をガードしたが威力が強すぎて吹っ飛ばされた。不幸なことにビーカーの破片のあった場所にダイブして腕をぱっくり切ってしまった。

スバル「……運の悪いやつだな。今ので気を失っていたらよかっただろうに」

本当に運が悪い。オレは切った左腕をきつく握りしめる。くそっ、頭が痛い……呼吸がしづらい……。

リオ「……た、たのむ……はぁ……」

くそつ、最悪だ。学園じゃ『こつ』はならないように気を張り続けているのに!?

スバル「なんだ? 命乞いか?」

リオ「たのむ、から……はやく、ふくをととのえて、くれ!! はあ……はあ……」

今、オレが出せる渾身の声を出すと、スバル様は自分がどんな格好をしているのか思い出してくれたのか急いで整えてくれた。

スバル「……見たな」

整え終わるとスバル様は親の仇を見るような目をしてそう言った。オレは見せられた側なんですけど!?! ……ああ、でもいつそのこと意識をぶっ飛ばされた方が楽だ。

スバル「おまえもあいつみたいにしてやるからな!」

スバル様が消火器を振り上げた瞬間、どこからともなく声がした。

「そこまでよ」

凜とした声が響いた。声のした方を見ると、スバル様の主である、涼月奏さんがいた。

スバル「お嬢様！！」

奏「スバル。消火器を置きなさい」

スバル「ボクにはこいつらを殺す義務が」

奏「スバル」

スバル「……わかりました」

主の命令には逆らえないのか、スバル様は渋々、消火器を床に置いた。

奏「そっちの坂町くんは大丈夫かしら？」

リオ「はぁ……はぁ……ジローなら、むだに、がんじょに、できて、るから、だいじょぶだ」

伊達にあのお方に鍛えられてないからな。

スバル「お嬢様。どうしてここに？」

奏「お花を摘みに行ったあなたがなかなか戻らないから、何かあったんじゃないかと思って捜しにきたのよ」

涼月さんがそう言うと、スバル様は申し訳なさそうに頭を下げた。

奏「庭渡くん、腕、大丈夫かしら？それに顔が真っ青よ」

リオ「……だいじょぶ、だよ」

嘘だ。かなり痛い。言葉も上手く紡げない。身体の震えも頭痛も収まらない。オレはネクタイをはずし、腕に巻こうとしたのを止めた。

奏「駄目よ。そのままだといけないから保健室で消毒しましょう」

リオ「……ほけん、しつ、いくまでのあいだ、だけでもしけつ、し



たい。ジローも、はこば、なきやいけな、いし」

奏「そう、それなら私が」

リオ「！？ 知らない！　じぶんでやるからオレにさわらないでくれ！」

涼月さんがオレの手をとろうとしたが咄嗟に怒鳴ってしまった。

スバル「おまえ、お嬢様に向かって！」

奏「いいわ、スバル」

スバル「ですが！」

食って掛かるスバル様を涼月さんが手で制してくれた。

リオ「……悪い。オレを心配してくれてるのはわかるけど、今は逆効果なんだ。だから、放っておいてくれ」

だいぶ呼吸が落ち着いてきたから普通に話せるようになった。オレ

はワイシャツを脱ぎ、傷口にハンカチをあて、その上からネクタイをきつく巻いた。

奏「それはできないわ。私の執事があなたに怪我をさせた。それく  
らいの責任はとらせてもらわないと」

リオ「……わかった。なら、保健室に行こう。オレも聞きたいこと  
あるし、そっちも聞きたいことあるんだろうし」

奏「話が早くて助かるわ」

オレはジローが汚れないように血塗れになった手をワイシャツでく  
るみ、ジローを抱えて保健室へ向かった。

x

リオ「失礼します」

奏・ス「失礼します」

ジローを抱えたままで保健室の扉を開けるオレに涼月さんとスバル様が続いて入る。

仲本「どうぞー……って、庭渡君、どうしたの！？それに坂町君も！？」

リオ「……とりあえず、ベッドを借りてもいいですか？」

仲本「いいから早く坂町君を寝かしてこっちに座って！」

リオ「はい」

仲本「何をしたらこうなるの！？ 顔の方はたいしたことはないけど……腕の方は何針か縫わないといけないわ！ 今すぐ病院に行かないと！」

リオ「……病院は行きたくないです」

仲本「あなたの病院嫌いは知っているけど、今はそんなこと言うてる場合じゃないでしょ！？」

奏「……少しよろしいですか、仲本先生？」

仲本「なにかしら？　今は庭渡君の手当てを」

奏「彼らは私に任せてもらえませんか？」

仲本「けど……え？　　きゃあ」

リオ「え？」

涼月さんはあることか仲本先生を往復ビンタした。……それも札束で……。どういうことだ？　あの浪嵐学園男子の憧れの涼月奏が……。ヤバイ、目眩が……。

奏「さて、邪魔者は退散したわね」

スバル「……お嬢様……」

オレがトリップしてる間に仲本先生は保健室から出ていったみたいだ。うん、ジローには悪いがオレも退散しよう。オレはそう決め行動に移ろうと出口へ向かった。

ゝだきつゝ

リオ「ひいつ!?!」

突然、後ろから抱きしめられたことに情けない声を漏らしてしまつた。背中に殺傷能力最大の二つの凶器が押し付けられてるんですけど!?! やばい……全身に悪寒が……。

奏「どこに行くつもりかしら?」

涼月さんがオレの耳元で囁くようにそう言う。うわっ!?! ゾクゾクするう!

リオ「ちょ、ちょっと……かばんをとり」

あ、もうムリだ。うん。むしろここまでもったことに驚きだよ。よく頑張ったな、オレ!

スバル「え? お、おい!」

限界を突破したようでオレの身体から力が抜けて、糸が切れた操り人形のように呆気なく倒れた。慌てるスバル様の声を聞きながらオレの意識はブラックアウトした。

### 第3話（前書き）

お気に入り登録してくれた皆様ありがとうございます。

### 第3話

リオ「く、来るなあああ！」

唐突に意識が覚醒した。横になりながら、ばくばくと拍動する心臓を左手で押さえつける。そう、あるうことが自分の上げた悲鳴で目を覚ましていた。カツコ悪すぎる。

リオ「……なんて、サイアクな目覚めだ」

サイアクだ。あの悪夢を見るなんて。

リオ「う……っ!？」

や、ヤバい!？ 胃からリバース信号が!! 周りを見るとゴミ箱を発見した。すぐに取らないと。俺はすぐさまゴミ箱を取ろうと右手を動かした。だが、突然、ジャラっと言つ音と共に、右手の動きが止まる。

リオ「……ジャラ？」

これって、手錠……ですよね？ なぜにオレの右手とベッドの柱を



しっかりと恋人同士のように繋いでるんだ？ オレ、拘束プレイはあまり好きじゃないんですけど？

リオ「……………」

えーっと、なんですかね。ひょっとして、オレはまだ夢を見ているのか。そんなことはとりあえずどうでもいい！ このままじゃゴミ箱が取れないじゃないか！？

リオ「……………っ！？」

マズい！ リバース！ リバース信号が赤になりかけてますから！  
！ マジで喉まできてますからぁ！！！！

「リオ、早くこれに吐け！」

そんなジローらしき声の言葉とともにゴミ箱がオレの目の前に出現した。オレはゴミ箱をしっかりと持ってリバースを行った。

リオ「……………ゲボツ、ゴホツ……………！？」

ジロー「二人とも悪いけど」

「わかってるわ」

誰かが出て行く気配がしたけど、今のオレには気にする余裕はない。

ジロー「全部出して楽になれ」

ジローはオレがこうなるのに慣れてるから優しく背中を擦ってくれ  
る。やはり持つべきものは幼馴染みで親友か。

ジロー「もう、大丈夫か？」

リオ「あ、ああ」

あれから十分くらい吐き続けたか……。事後処理も終え、ジローが  
窓を開けながら心配そうに訊くので、力ない笑みで返す。

ジロー「そうか。……涼月、近衛。もう大丈夫だから、入ってきて  
くれ」

涼月さんにスバル様？　なんであの二人がオレの家に……って、こ

こは俺の家じゃなく、オレが意味嫌う病室じゃないか。

奏「庭渡くん、大丈夫？」

スバル「……」

ジローが呼んだ人物が入ってきた。スバル様は気まずいのか無言だし。

リオ「……ジロー」

ジロー「リオのことを頼むよ。俺は何か飲み物、買ってくるから」

ジローに状況説明を頼もうとしたが、あるうことが目線を反らし、出て行きやがった。

奏「スバルも行ってきた」

スバル「かしこまりました」

涼月さんに言われ、スバル様はジローを追いかけていった。待つ

てくれ！　ちよっ！？　オ、オレを女の子と二人っきりにしないでくれえ！！

奏「大丈夫かしら。その手錠、痛くない？　サイズ的には小さくないと思うんだけど」

リオ「……ん？」

ちよつと待て。この女、今何気にとんでもないことを言わなかったか？

奏「安心して、庭渡くん。手術は、無事成功したわ」

リオ「……なに？　それならオレも改造人間の仲間入りなのか！？」

奏「そうよ。あなたはもう普通の人とは違うわ。試しに『変身っ！』って叫んでみて。それであなたに秘められた力が解放されるから」

リオ「な、なんだと！？　よ、よし！　わかった！　いくぞ！　って、やるわけないだろ！？」

オレは途中まで合わせていたがさすがにその先はないだろ？　恥ず

かしすぎるって。高校生にもなって「変身っ！」とか叫んじゃったらさ。そんなヤツがいるなら是非見たいね。

奏「く、あはは……」

笑い声が聞こえる。信じられないことに、あの涼月さんがお腹を押さえて、窒息死しそうなくらいに悶えていた。

奏「く、ふふふ。いいノリツツコミね」

コイツ、本当に涼月奏さんなのだろうか？ いつもとは印象が違すぎるんですけど……。

奏「でも、残念だね。ジローくんみたいに叫んでくれると思ったのに」

……あ、いたんだ。しかも、かなり身近に。さすがだな、ジロー。オレはオマエを侮っていたよ。

リオ「あ、あの……涼月さん？ ちょっと訊いてもいいか？」

奏「ふふ、何かしら庭渡くん。それともクラスのみんなみたいに」

リオ『 って呼んだ方がいいかしら？ 』

ジロー「別に呼びやすい方で呼んでもらって構わないけど……」

奏「ありがとう、リオくん。訊きたいことはいっぱいあるでしょうから、ゆっくりでいいわよ」

リオ「じゃ、じゃあ、訊くぞ？ オレのことを繋いでのって、アンタ？」

奏「そうよ。あ、心配しないでね。私だって怪我してる左手一本のあなたに犯されるつもりは毛頭ないから」

ジロー「アンタはオレをどんな人間だと思ってんだよ！ そんな心配してねえよ！ ！」

誰がそんなことするか！ 悲しいがオレにそんなことできるわけねえんだよ。

リオ「……そういや、手術って本当にしたのか？」

オレは丁寧に巻かれた包帯を見て呟く。

奏「ええ。ここは涼月家が経営してる病院だから最高のスタッフにやらせたわ。傷痕は残らないから安心して」

リオ「そうか、なんか面倒掛けたみたいで悪いな。治療費は後で必ず返すよ」

奏「いらないわ。あなたが私のお願いを聞いてさえくれれば」

涼月さんは静かに口唇を歪めた。……怖っ！　なんかすんごい怖いんですけど！！

奏「そうね、最初はもちろん去勢」

リオ「待った！　何が望みだ涼月さん！　俺にできることならなんでもするぞ！」

認識を改めよう。コイツ、ただのお嬢様じゃない。ただのお嬢様が、こんなふざけた性格してるわけがない……！　つか、お願いが去勢っておかしいだろ！？　しかも、もちろんって言ったぞ！

奏「勘違いしないで。あなたが私にできることなんて何もないわ」

はつきりと涼月さんは断言した。いや、まあ、そうなんですけどね。オレが何かできるだなんてこれっぽちも思えませんでしたけどね、本当。

奏「あなたを拘束しているのは、あなたが私の執事の秘密を知ってしまったからよ」

ああ、やっぱりか。コイツとスバル様がいる時点で薄々そうじゃないかって思ってたんだ。



## 第4話（前書き）

KENさん、感想ありがとうございます。

## 第4話

リオ「なあ……なんでスバル様って男の格好で学園に通ってるんだ？」

一番の疑問を訊ねた。コイツなら、全て知っているはずだ。否、知らないはずがない。なんたってスバル様の主なんだから。

奏「強いて言うなら、家庭の事情ね」

リオ「家庭の事情？」

奏「ええ。あの娘の……スバルの家系の男子は代々私の家に執事として仕えてきたの。だから、あの娘も執事をしているのよ」

家系の男子？　ってことは、スバル様は……。オレの中である答えが導き出された。

リオ「そうか。それならしかたないか」

奏「あら？　これだけで納得できたの？」

涼月さんが意外そうに訊いてきた。

リオ「納得はできない。だけど、家庭の事情なんだろう？ スバル様とあまり親しくもないオレが深く訊いていいことじゃないだろう」

奏「それもそうね。話を戻すけど、私の父　つまりこの学園の理事長が、スバルが私の執事である為の条件を出したのよ。その条件が、三年間、誰にも女だと知られずに学園生活を終わるというもの。つまりそれくらいのができないようじゃ女に涼月の執事は務まらない。きっとそう言いたかったんでしょね」

リオ「……え？　ちょっと待った。それってつまり……」

奏「そう。スバルは今日、あなたたちに自分が女であることを知られてしまった。あの娘は自分が涼月の執事であることに並大抵じゃない拘りを持つてるの。だからあなたたちの口をどうにか封じようとした。……ごめんなさい。私の執事が迷惑をかけたわ」

リオ「……」

そうだったのか。だから、あんなにオレ達を殺そうと必死になってたんだ。いや、だけど、あれはれっきとした殺人未遂だぞ。犯罪者になったら意味がないだろ。

ジロー「ほら、近衛。早く行けって」

スバル「だ、だけど……」

リオ「ん？」

ドアの方を見るとジローとスバル様がなんか押し問答していた。

リオ「何してんの？」

スバル「……あ、あの！？」

リオ「なに？」

スバル「う、ごめんなさい！」

リオ「は？」

スバル「あのときは動揺してて……本当に悪気はなかったんだ。そ

の、だから……怪我をさせてごめんなさい！」

リオ「……」

おいおい、あのスバル様がオレに向かって頭を下げてるぞ。ゲキレアじゃね？

リオ「……イヤだ」

オレは低い声で呟いた。

スバル「え？」

リオ「……ジローは見たところ傷がなさそうだけど消火器で頭を殴られてるんだ。この後、どうなるかわからないんだぞ。眠ったら、二度と目が覚めないかもしれない」

ジロー「怖いこと言うなよ」

リオ「それにオレはこのザマだ。謝っただけで済まそうなんて虫が良過ぎるだろ」

スバル「えっと……それは、その……」

リオ「こつち来いよ。一発で済ませてやるから」

オレが拳を作るとスバル様はビクツとするが、覚悟を決めたのかオレの腕が届く距離に来た。流石は男装執事だな。

リオ「良い度胸だ。……いくぞ！」

スバル「……ッ!？」

スバル様は歯を食いしばってる。

スバル「……?」

だが、覚悟した衝撃が来ないことに目を開けて首を傾げる。

「パシンッ!」

そんなスバル様にオレは渾身のデコピンを放つ。

スバル「いたっ！」

リオ「ほら、今回はこれで赦してやるよ」

スバル「？……？？」

スバル様は額を両手で押さえて不思議がっている。ドチクショー！  
メチャクチャカワイイんですけど。

リオ「だから、今回はデコピンで赦してやるって言ってるの。ただどな、いくら秘密を守るためだからって暴力に走るのは止めるよ。次やったら、本当にぶん殴るからな！」

スバル「う、うん」

リオ「わかったならよし！」

ゝ ナデナデゝ

オレは安心させるように笑顔でスバル様の頭を撫でる。おーやっぱ

り、女の子の髪だー。撫で心地最高だな。

スバル「!?!?!」

ジロー「リオは相変わらず女に甘いよな」

オレとスバル様のやりとりを見て、ジローは呆れ気味でそう言った。

リオ「親父と母さんからの教えを破るわけにいかないからな。女性には優しくあれってな。暴力なんてもつての他だ」

奏「……ふうん……」

リオ「な、なに? どうし」

静かだと思った涼月さんが目を細めてオレを見ていた。やな予感があったので涼月さんに訊こうとしたら……あろうことが、涼月さんがオレの腰辺りに馬乗りしてきた。

リオ「!?!」

呼吸が止まる。軽い。鳥の羽のようだとまでは言わないけど、涼月



さんの身体は思ったより軽かった。

リオ「……ちょ、ちょっと！ 何してんですか、アンタは!？」

奏「なにつて、リオくに馬乗りしただけよ」

長い見とれるくらいに綺麗な髪をいじりながら、涼月さんは昼下がりのコーヒープレイクのごとく落ち着いてらっしゃる。対するオレは酸欠寸前の金魚みたいに口をパクつかせていた。というか酸欠ツス！

奏「リオくん。あなたって、特殊な体質らしいわね」

、ギクツ、

奏「ねえ、黙っているつもり？」

涼月判事による臨時裁判が開廷。被告人はもち、オレ。こうなったら黙秘権だ。拘束されて動けない以上、屍のように無口になってこのピンチを乗り切るしかあるまい！

奏「別にいいわよ。それなら 身体に直接訊くから」

リオ「は？」

驚くオレの腰の上で、彼女は口元を歪めた。その白い指がオレのシヤツのボタンを次々と外していく。

リオ「お、おい！　なんで服を脱がすんだよ」

ヤバい、ヤバい！　発作が！　頭痛えし、呼吸が！！　身体が尋常じゃないほど震えてますからあ！！

奏「静かにして。手元が狂って内蔵を傷つけちゃうかもしれないでしょう」

リオ「さりと、こわいこと……いうなや！」

奏「ちなみに、私の握力は片手だけで八十キロを超えるわ」

リオ「あきらかに、ウソ、ですよね！」

呼吸しづらい上に大声出してるせいかメツチャ体力がなくなってる

ような気がする。

奏「ふふ、バレちゃった。でも、大丈夫。私の家に代々受け継がれた拷問法の中に、肋骨を一本ずつ」

リオ「やめっ！ わかった！ もう……わかったから、オレにふれるのは、やめて、くれませんかねえ……っ！」

魂を込めた絶叫も、無情にも涼月さんには届かなかつたらしい。はだけたシャツの隙間から、白い指がオレの肋骨の上をへびみたいに這っていく。細い指先。冷やかなその体温に、心臓が跳ねた。

「ドクンッ！」

あ、ヤバい、マズい。体温が急激に下がっていく感覚の中、涼月さんに触れられた箇所だけが熱を持った。……はい、アウトォー！

## 第5話（前書き）

あきさん、紫苑さん感想ありがとうございます。

## 第5話

奏「え？」

涼月さんの唾然とした声が漏れた。そりゃそうだろう。自分の触れた所だけが異常に赤くなり、火傷するほどの熱を帯びているのだから。ちなみに、オレは脱力感からボウとした感じで涼月さんを見ている。しかも、蕁麻疹が出たところが異常に痒い。

奏「……本当にジローくんの言う通りだったのね。ジローくんのもだけど、アレルギーだとしたら訊いたことがない症状よね」

リオ「って、しってて、はあはあ……やった、のかよ……」

奏「だって、確かめる必要があるでしょう？ 激しい頭痛、身体の震え、過呼吸、蕁麻疹。ひどいときは戻ってしまうんでしょう？ 女の子に触れられただけでこんな症状が出るなんて信じられなかったのよ」

この人は悪魔か？ いや、そんなカワイイもんじゃないな。魔王だ。これからはサタン涼月と呼ぼう。

リオ「……ジロオ、オ、マエ#」

ジロー「……しかたなかったんだ」

リオ「しかたないで……はあ……すますな。はあ、もういい。ジロー、から……オレのことは、きいたんだろ？ あえて、オレか、らは……せつめいしない、からな」

奏「ええ。つまり、こういうことでしよう。あなたは、女の子に触れられるのが怖くて怖くて仕方がないチキン野郎なのね」

リ・ジ「ぐ……」

グサツと心臓にナイフを突き立てられた気分だった。ジローも同じのようだ。齒に衣を着せないタイプだな。直球過ぎません！？

奏「ねえ、そうでしょう？ 庭渡 理桜くん」

リオ「!?!」

こ、このタイミングでフルネームだと？ ま、まさかこの人……気付いたのか？ オレの名前の秘密に……！ いや、そんなはずない。オレのはジローみたいにストレートじゃない。わかるヤツはよっぽ

ど性格がヒネくれてる。

奏「どうかしたの？ 何か言ってよ、庭渡 理桜くん」

リオ「……………」

奏「ニワトリオウくん？」

リオ「……………」

奏「ニワトリ、オウくん？」

リオ「……………」

奏「チキングくん？」

リオ「うわあああああつ！」

耐え切れずに、オレは絶叫していた。

スバル「チキング？」

リオ「ヤメロ！ そのなで、オレをよぶなっ！」

ジロー「リオも俺と同じなんだよ。庭渡理桜。ニワトリ、オウ。ニワトリを英訳すると？」

スバル「……チキン……」

ジロー「オウは王様でキング。それを合わせてチキング。曲解だけど、チキンの王様だ」

オマエだけには言われたくないわ、ジロー！

奏「ところで、リオくん」

急に涼月さんの雰囲気が変わった。

奏「あなた、自分の恐怖症を治したいとは思わない？」

リオ「……そりゃあ、オレだって……はあ……なおしたいよ」



この体質が治らない限り、オレのささやかな夢も叶えられないからな。

奏「だったら、手伝ってあげましょうか？」

リオ「それは、ありがたい、けど……。なにが、のぞみだ？」

奏「リオくんは頭の回転が早いのね」

リオ「どうも。で？」

奏「スバルが女の子だってことを、誰にも言わないで欲しいの」

たとえ死んでもね、なんて物騒な言葉が付け足された。要はオレがスバル様の秘密を死守する代わりに、涼月さん達はオレの女性恐怖症を治す手伝いをしてくれるってな。

奏「あなたたちがスバルの秘密を知ってしまったことは、まだ父の耳に入っていない。あなたたちが秘密を守れば、私たちが条件を破ってしまったことを知られることはないわ」

リオ「いいふらす、しゅみなんて……はぁ……ないけ、どさ……メ  
チャ、ふせい、はぁはぁ……ですよね？」

奏「バレなければいいのよ。どう？ 私たちと協定を結ぶ？ ちな  
みにジローくんは協定済みよ」

リオ「きょうてい……はぁはぁ……って、いうより、きょうはんだ  
な。でも、ことわったり、したら……はぁはぁ……ふじの、じゅか  
い、いき、だろぅし……オレたちが、スバルさまの、ひみつを……  
バラしたら、オレたちが、バラされるんだろぅし……」

もう、喋るのもしんどい。つか、早く退いて欲しいんですけど。ジ  
ローにアイコンタクトをする。

ジロー「……リオも涼月の話に乗るって。リオ、近衛は主の命令に  
従うらしいぞ」

リオ「おう」

ジローはオレの気になってることを言ってくれた。なら、安心か。

奏「ふふ。じゃあ決まりね」

なぜか涼月さんはやけに楽しそうに笑っていた。うん、やな予感しかしないよ？

奏「ところでリオくん。訊きたいんだけど、あなたの女性恐怖症の症状ってどんな時に出るの？ 出てからも女の子に触られ続けたらどうなるの？」

リオ「え？ ん、しょうじょうがでるのは……ふいうちで、ふれられたときと……ちょじかんで、きよくどの、せつしょくじ、かな？」

それと、言わないけど半脱ぎで迫られたりしたらマジでヤバいね。触れてないのに発作が出るからな。これだけはジローよりもチキンなのを認めよう。

ジロー「さわられつづけると、たえきれなく……なってしっしんするね」

ジロー「……リオ、ご愁傷さま」

事実、保健室で涼月さんに抱きつかれて失神したしな。それとジロー、なに手を合わせて不吉なことを呟いていやがる！

リオ「けど、それがどう」

と。そこまで言ってオレは黙った。正確には黙らせられた。涼月さんの指が、再びオレの肋骨に伸ばされていた。

リオ「あ、あの、すすつきさん？」

奏「心配しないで、リオくん。これは実験よ。今後の為にも、あなたの身体がどこまで耐えられるのか試さなくちゃいけないの」

三日月のように笑うサタン涼月。ヤバい。コイツ、明らかに面白がつてやがる。

リオ「や、やめっ！ そんな、ことしなくても……ふ、ひあんっ！」

奏「うふふ。ちょっと触っただけなのに可愛い声を出すのね」

細くて長い指がわきわきと肌の上を這いずり回っていく。……ダメだ。傍から見れば天国のようなシチュだが、女性恐怖症 チキン症候群のオレにとってはただの拷問だ！ 視界はすでにブラックアウト寸前。このままだったら魂があの子へ旅立つ。

リオ「た、たすけて、くれ、ジロー！ スバルさま！！ このまま、じゃ…… ホントに、ムリ！」

掠れた声で精一杯、二人にSOSを出す

ジロー「スマン、リオ。俺には荷が重い……」

スバル「…… ボクは執事だ。お嬢様の命令は絶対なんだ」

目を反らされた。

リオ「そんなこと、いわずに！ たのむから…… オレを、みすてなひゃああんっ！」

奏「あら、リオくんったらこんな所に切り傷があるのね。それにジローくんの家族に鍛えられてるだけあって身体が締まってる。これなら、失神した後も楽しめそうね」

うふふつ、と響き渡る笑い声。何を楽しむつもりなんだよ！

…… ああ、今日からこんな生活がオレの日常になるのか。徐々に遠のいていく意識。その中で、オレは神様に自分の貞操の無事を祈っ

て  
お  
い  
た。

## 第6話（前書き）

今回は少し短いです。

## 第6話

どんなに暗い夜もいつかは明ける。どんなに明日が嫌でも朝はやってくる。そんなわけでオレは自分の部屋の時計を見た。ただいまの時刻は朝の六時半。うん、いつもの時間だ。……それより、オレはどうやって家に帰ってこれたんだ？ まあ、気にしちやいけないよな。

リオ「ん？ 雨か」

窓の外からは雨音。昨夜までは降っていなかったが、今朝の天気は俺の心の中のように憂鬱らしい。

リオ「……シャワーでも浴びてさっぱりとするか。昨日のままみただし」

自分の格好を見ると制服のままだった。カツラもカラコンも着けたままかよ。カラコン着けたまま寝るのって怖いんだけど。とりあえず、タオルと着替えを持って脱衣所へ向かう。

リオ「……毎日、かつたるいんだよな……」

鏡の前に立ち、カツラとカラコンをはずす。すると、本来の自分が



鏡に映る。灰色の髪に灰色の瞳。目立つよな、これ。母さんが欧州系のハーフだったんだけど、その血を強く色濃く受け継いでしまったらしい。顔は親父似なんだけどな。この姿を知るのは学園ではジローとジローの妹である紅羽<sup>クレハ</sup>。そして中学一年からずっと同じクラスの腐れ縁の黒瀬 ヤマト《クロセ ヤマト》。この三人だけだ。

リオ「気合……入れねえとな」

自分に言い聞かせるように呟いた。心機一転して気持ちを引き締めないと。なにせ、今日から始まるのだ。涼月奏による、オレたちの治療プログラムが……。昨日の病室。あのときはなんとか無事に切り抜けた……。はず。だが、もはや学園に心の休まる場所はない。つまり、この家だけがオレの最後のオアシスだ。ならば、せめてこの安息だけは噛み締めねば。

リオ「さて、早くシャワー浴びて、朝食作んねえと」

オレは服を乱雑に脱ぎ捨てて浴室へ入った。

×

リオ「……ん？」

〃ピンポン〃

脱衣所で濡れた髪をタオルで拭いていると呼び鈴がなった。こんな朝から誰だ？ ジローか？ なら、このままでいいか。

♪ ピンポーン×5 ♪

リオ「だぁー！ 聞こえてるっての！！ しつこいぞ、ジ、ロウ？」

♪ バンツ！ ♪

玄関を勢いよく開ける。

リオ「……」

オレは言葉を失う。そこにいたのはチキン・ジローなんかじゃなく、クールビューティー涼月奏がいた。

奏「…… / / /」

なぜか涼月さんも沈黙していた。しかも、心なしか頬が赤く染まっていた。……状況を確認しよう。呼び鈴を押したのはジローではなく涼月さん。そして、ジローだと勝手に判断したオレは、シャワー

を浴びた後だから 上半身裸で頭にタオルをかけている。……うん、涼月さんの頬が赤くなる理由はわかったよな、オレ。

リオ「……きゃああああ！？／／／」

気がついたら、オレは女の子のような悲鳴をあげていた。

×

奏「く、あはは……。さっきの悲鳴……。く、ふふふ。女の子みたいで。リオくん、可愛いかったわ……。あは、あはは。」

リオ「そ、そんなに笑わなくたっていいだろ！／／／」

涼月さんが笑い泣きをしていた。オレは半泣きで怒鳴っていた。

奏「あ、あはは……。だ、だって……普通、悲鳴をあげるの女の子である私の立場なのに……」

リオ「しかたないですよね！ オレ、裸見られたんですけど……！／／／」

奏「いいじゃない。昨日も見たわけだし。減るものでもないんじゃない。」

リオ「減る！なんか大切なモンが減りますからあ！」

なんでだろう。この人には恥じらいと言う言葉がないような気がしてならないんです。さっき、頬が赤くなったのは、オレの気のせいだったんだ。

奏「大丈夫よ」

リオ「なにが？」

奏「……………」

リオ「……………はあ……………もういいよ。それでこんな朝っぱらからなんの用？」

なにが大丈夫かわからんけど、これ以上は疲れるから話を変える。

奏「これからあなたたちが秘密をバラさないように、できるだけ監視することになったの。それで見張りながら一緒に登校しようと思っ  
てね」

リオ「涼月さん直々に？　そういうのってスバル様にやらせるもん  
じゃねえの？」

奏「スバルはジローくんのところよ」

リオ「なるほど。ジローってよっぽど信用ないのな」

奏「……そういう訳じゃないんだけどね。色々あるのよ」

オレの言葉に涼月さんが困ったように言った。

リオ「ふ〜ん……ま、深くは聞かないけどな。ところで涼月さんは  
飯食べてきてるんだよね？」

奏「食べてないわ。リオくんのところでご馳走になろうと思ってね」

リオ「別にオレは構わないけど。涼月さんの口に合うかは知らない

ぞ」

そう言い、涼月さんの前にいつもの朝食を出し、涼月さんの向かいに座る。

「兄さあゝゝん！ あっさだよあゝゝゝゝっ」

「ドカンッ！」

突然、爆竹みたいな声が轟いてきた。相変わらず朝からテンションの高いな。

紅羽「うりゃあああっ！」

ジロー「ごぶはっ！？」

紅羽「おはよっ兄さんっ！ えーい、アンクルロック！」

ジロー「ごきやああっ！」

紅羽「さらに続けてSTF！」

ジロー「ちょ、まっ……ぎにゃああっ！」

紅羽「さらにそこからのチョークスリパー！　そしてトドメの腕ひしぎ逆十字い！」

ジロー「ぎゃあああっ！」

ジローの悲鳴と紅羽の技名が響き渡る。うん、いつも通りの朝だ。目の前にいる涼月さんは驚いたような呆気に取られたような顔をしていた。まあ、初めてだとそうなるよな。

## 第7話（前書き）

リオ「更新したぜ」



## 第7話

奏「ところで」

リオ「ん？ 何？」

食べ終わった二人分の食器を洗っていると、コーヒーを優雅に飲んでいる涼月さんがそう言った。

奏「その姿はなにかしら？」

リオ「何って？ エプロン姿のこと？ 料理するときや洗い物するときには普通じゃないか」

オレは自分のエプロンを見て、首を傾げた。そんなにオレってエプロン似合わないかな？ って、男のエプロン姿なんぞ、似合わないわな。

奏「そうじゃないわ」

リオ「そうじゃない？」

何？ オレなんか変な姿してたっけ？

奏「その髪と瞳のことよ」

リオ「……………」

髪と瞳？

リオ「……………あ！？」

やべっ！ カツラすんの忘れてた！？　　ってか、あんな格好で出迎えに行ったらごまかしようないからどっちみち涼月さんにバレるか。

奏「気づいてなかったのね」

オレの様子に涼月さんはくすくすと笑った。

リオ「あ、うん。朝からジローたち以外と会うことなんてなかったからさ」

マジで油断してたぜ。

奏「いつもは変装してたの？」

リオ「まあな。こんな色だと何かと目立つしさ。結構、絡まれたりするからメンドーなんだぞ」

奏「絡まれる？」

リオ「そ。ヤンキーたちにいちやもんつけられてボコられるんだよ。オレ一人に対してだいたい四、五人でかかってくるだぜ」

ま、その度に返り討ちにしてるんだけどさ。ちょうど、イライラが最高潮の時に来るから、いいストレス解消になるしな。正当防衛になるからオレに非はない。

リオ「それに、こんな髪色じゃ教師たちに文句言われるの目に見えてるし。生まれつきだって説明してもウソって言われるし。地毛って認められても黒に染めてこいって言われるのがオチだしさ」

奏「たしかにそうね。リオくんはどこかのハーフなの？」

リオ「んや、オレはクォーター。母さんが欧州系のハーフだったんだらしいんだ」

奏「知ってる人はいるの？」

リオ「坂町家と同じクラスの黒瀬ヤマトくらいだな。あ、そうだ。理事長にはこのこと、黙ってもらっていいかな？」

奏「ええ、別にいいわよ。あなたが私の要件を飲んでもくれたらね」

リオ「わかってるって。んで、その要件ってのは？」

奏「私にこの家の出入りを自由にさせてほしいの」

リオ「それだけ？」

正直、もっとヤバイのかと思った。

奏「ええ。どうかしら？」

リオ「オレは全然オツケーだよ。」

オレ的にはかなり嬉しいからな。

奏「交渉成立ね」

リオ「あ、カギはいつもポストの中だから。合鍵とか作んなくて大丈夫だぞ」

奏「リオくん」

リオ「ん？」

奏「不用心よ。カギは持ち歩きなさい」

リオ「はい、わかりました。」

涼月さんの目がマジだったのでオレは即答で頷いてしまった。けど、カギ持ち歩くのメンドーなんだよな。

奏「リオくん」

オレの名を呼ぶ涼月さんの声色がワントーン下がった気がする。この人はオレの思考を読んでたりするんですか？

リオ「……心配してくれてありがとう。それと、さ」

奏「なにかしら？」

リオ「すー……はー……」

オレは深呼吸をしてから勇気を出して、涼月さんに伝えたかった言葉を言う。

リオ「オ、オレの初めての女になってください！」

奏「え、ええっ！？／＼／＼」

精一杯の勇気を出したオレの言葉に驚いて涼月さんの顔が赤くなった。驚く涼月さんもカワイイ。……じゃなくて、なんで？

奏「リ、リオくん……初めての女ってどういふことかしら？／＼／」

リオ「ふえ？／／／……あ、ち、違う！？初めての女友達！」

涼月さんに言われ、自分の犯した間違いに気づく。言葉が足りてねえよ、オレ！！　どんだけテンパってんですか！？

奏「……女友達ね。そうよね」

リオ「え、えゝと、ダメ、かな？」

奏「もちろんいいわ」

リオ「ホント！　やったゝ！！」

オレは嬉しさからガッツポーズをしていた。この体質を知られる怖さから女友達なんてなかなか作れなかったもんな。

奏「リオくんったら大袈裟よ」

リオ「すごい嬉しいじゃんか！　だって初めてできた女友達が君みたいなすごい美人なんだぜ　これからよろしくな。か……」

奏「か？」

リオ「か、奏／／／」

うう……／／／メチャクチャ顔が熱い……。それに声、裏返ってなかったか？ 女の人を名前で呼ぶのってこんなに恥ずかしいことだったか？ 紅羽を呼ぶときはなんともないのに。

奏「うふふ、よろしくねリオくん」

リオ「あ、ああ／／／」

涼月　じゃなくて、奏はふわりと柔らかい笑顔で微笑んだ。ヤバい、ヤバいね。メチャクチャカワイイんですけど！ この笑顔で心が満たされるや　今ならサタンじゃなくてエンジェルって言える！

ジロー「ぎゃああああああっ！　目がっ！　目があっ！」

リオ「……」

ジロー……。オマエ、朝から叫びすぎだからな。目に何があったん



だ？　　ってか、オレの幸せな気分をブチ壊すんじゃない！

奏「スバルとなにかあったみたいね。後でスバルに確認を取らなくちゃ」

リオ「なんか楽しそうだな」

奏はさっきの笑顔とは違うイタズラっ子ぽい笑顔を浮かべていた。素材が良いと、どんな表情でも惹き付けられるからズルいよな。

奏「だって、ジローくんなら面白いことしてそうなもの」

リオ「……たしかに。ジローならしてそうだな。っと、もうそろそろ学園に行かないとな」

時計を見るといつも家を出る時間だった。

奏「あら？　ジローくんを助けに行かないの？」

リオ「行かない。行きたくない。今、行ったら絶対ジローと同じ目にあいそうだもん。下手したら朝から発作が出て学園に行けなくなるもん」

奏「賢明な判断ね」

リオ「だろ。奏はいつものリムジンで登校なんだよな？」

奏「違うわ。今日は歩いて行こうと思って。リオくん、一緒に行きましょう」

リオ「マジ！？ んじゃ五分！ いや、一分待ってて！ すぐに支度するから！」

オレはカツラとカラコン装着と鞆を取る為に部屋までダッシュした。

奏「……リオくんたら、カッコいい顔して時々カワイイことするんだから。ちょっとドキドキしちゃうじゃないノノノ」

## 第7話（後書き）

誤字脱字・感想・アドバイスがありましたらお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4056y/>

---

迷えるカノジョとチキンなオレと

2011年11月24日20時47分発行